

永 谷 橫 穴 墓

発掘調査報告書

1986

高鍋町教育委員会

例　　言

1. 本報告書は、宅地造成工事に伴い、高鍋町教育委員会が実施した横穴墓の緊急発掘調査である。

2. この発掘調査は、昭和57年3月25日から同年4月2日まで行われた。

3. 調査関係者

西都原古墳研究所長　日　高　正　晴

文化財担当者　本　部　　寛

他、高鍋町社会教育課職員

4. 遺跡の実測、写真撮影および出土遺物の測図、それに本文の執筆はすべて日高正晴が担当した。

5. 1号横穴墓出土の歯牙については、西都市在住の歯科医日高喜一郎氏の調査報告による。

目 次

I	発掘調査の経過	1
II	位置と環境	4
III	永谷1号横穴墓	7
1.	内部構造	7
2.	出土遺物	7
IV	永谷2号横穴墓	12
1.	内部構造	12
2.	出土遺物	14
V	まとめ	19
付 篇		
1号横穴墓出土の歯牙について		20

永谷横穴墓発掘調査報告書

序

本報告書は、昭和56年4月宅地造成のため国道10号線(永谷地区)沿いの西側に面した丘陵傾斜地を掘削したところに横穴墓二基が露出したための発掘調査記録です。

本調査で1号墓から、金環・銀環・銅環・須恵器・直刀破片などが出土し多大な成果をあげることができました。

そこでこの報告書が学術資料としてまた、社会教育・学校教育等に広く活用していくだければ幸いです。

尚、本書の発行にあたり、現地調査から報告書発刊までご指導いただいた、日高正晴西都原古墳研究所長・宮崎県教育庁文化課並びに関係各機関等発掘調査にご協力賜りました地元の方々に厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

高鍋町教育委員会

教育長 岩永高徳

I 発掘調査の経過

高鍋町大字南高鍋12.377-2、通称、上永谷において、昭和56年4月森川重富氏が宅地造成のため、東面した丘陵傾斜地を掘削したところ、横穴墓2基が露出した。高鍋町教育委員会より筆者に発掘調査の依頼があったので、昭和57年3月25日文化財担当の本部寛氏とともに現地調査を行い、発掘調査の日程につき協議した。調査結果、丘陵崖面に構築されている2基の横穴墓を南から1号、2号と名称づけることにした。29日は終日、玄室内部に天井部分から落下した崩土の除去作業を進め、30日には玄室内部の調査をすべて済ませた。そして31日から4月2日までかかって横穴墓の実測を終了した。





図版1-1 永谷横穴墓より海岸線を望む



図版1-2 左、第1号 横穴墓 右、第2号 横穴墓



図版1-3 2号 横穴墓

II 位置と環境

横穴墓の発見された上永谷は高鍋町の南端、洪積層の丘陵上に位置し、南は新富町日置地区と相接している。この海岸線に迫る永谷の丘陵台地は国道10号線に沿って、北の方へ約2.5km、宮田川の右岸ひばり山丘陵地まで続いている。それでこの横穴墓も国道から数mの崖面に、開口した玄室を確認することができる。この地点から東の方約130mの所には日豊本線が走っているが、さらにそこから東へ約300mもゆくと、日向灘の海岸線に出る。国道の標高は12mであるが、上永谷の丘陵台地上は44mとなっている。

さて、高鍋町を貫流する小丸川の中、下流域には多数の古墳が群在しているが、この地方は西都原古代文化圏内^①で、西都原地方とともに古代日向において繁栄を極めた地域である。まず小丸川下流の左岸丘陵台地に分布する持田古墳は、計塚をはじめとして前方後円墳を含む85基の古墳が国の史跡指定となっているが、その上流の川南町西別府台地上にも、同じく国指定の川南古墳群が横たわっている。ところで、小丸川の右岸丘陵台地上にも多数の高塚古墳が散在している。この横穴墓のある永谷から日置地区にかけて12基の古墳、またこの台地上の北側、南九州大学の建っているひばり山一帯にも13基点在しているが、一方、この丘陵台地から下った小丸川河口に近い蚊口地域にも円形墳が5基遺存している。なお、ひばり山台地から西の方、毛作地区にも数基の古墳が存在する。さらに、高鍋町市街地の西方台地上の牛牧地区にも15基の古墳が確認できるが、青木山王地区にも、10数基の墳墓が姿を現わしている。以上、持田古墳群をはじめとして、町内には約150基の高塚古墳が群在することになるが、横穴墓も、この永谷以外で、光音寺に昭和44年2月に3基、47年11月に2基と從来開口していた横穴墓2基と合わせ7基、それに陣ノ本一帯に15基、鳥帽子形地区に3基などが確認できるので横穴墓だけでも23基を数えることができる。この永谷地区においても、現在2基の横穴墓が発見されているだけであるが、



図版2-1 第1号 横穴墓の玄室

この東側傾斜面には、まだ未確認の横穴墓が存在すると推察されるので、関係当局におかれでは、この地域の開発に対して注意深く見守る必要があると思われる。

註

- ① 日高正晴『古代日向における西都原古墳文化の形成』
西日本史学会宮崎支部報、宮崎大学教育学部内、1985年7月
- ② 日高 正晴『高鍋の古墳』高鍋町教育委員会、昭和53年3月
- ③ 石川恒太郎「高鍋町光音寺横穴古墳調査報告」「宮崎県文化財調査報告書」第15集
県教育委員会、昭和45年3月
- ④ 石川恒太郎「高鍋町光音寺横穴調査報告書」「宮崎県文化財調査報告書」第17集
県教育委員会、昭和48年3月

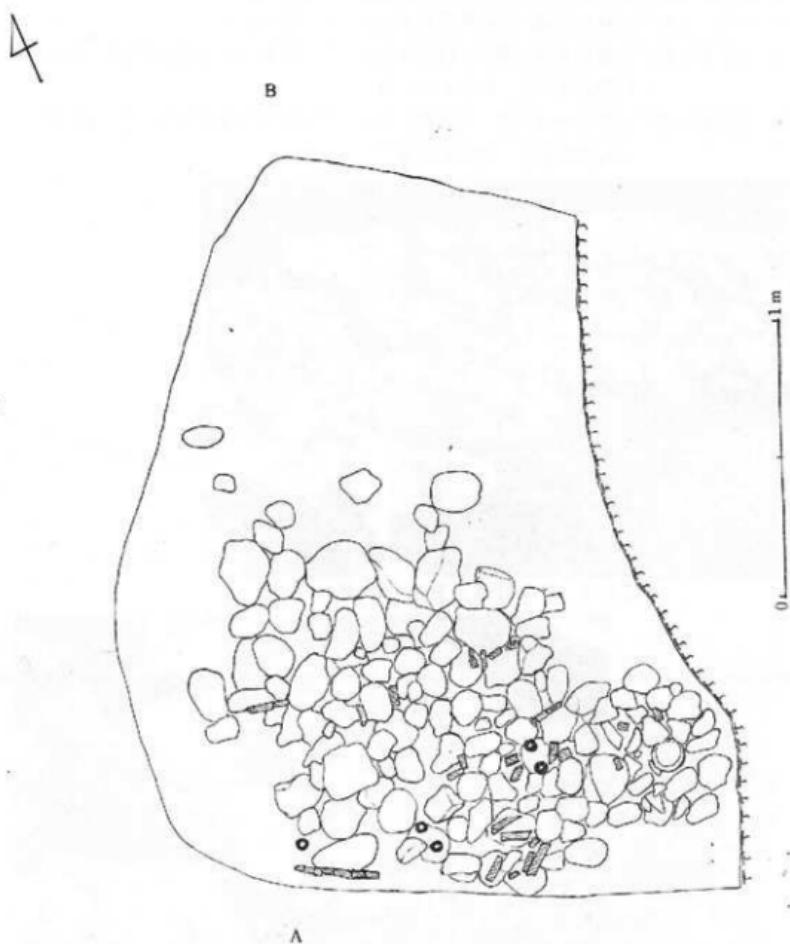


図版2-3 第1号横穴墓玄室内部

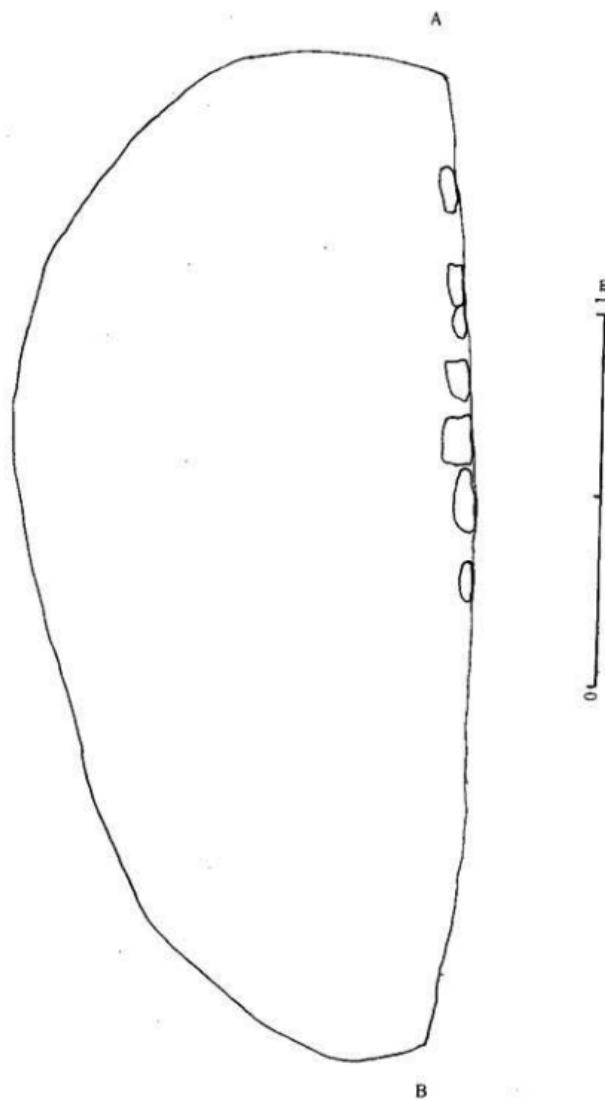


図版2-4 第1号横穴墓玄室内部副葬品

第1図 永谷1号横穴墓実測図



第2図 永谷1号横穴墓実測図



III 永谷1号横穴墓

1、内部構造

玄室内部は、不整形状の隅丸方形プランを呈しているが、玄室の東側部分は造成工事により、相当に破壊されて羨道部分は全く姿を消し、すぐ東側前面は急傾斜の断崖になっている。また天井部分も同様、造成により玄室内部東側の大部分は剥落していたが、形態的にはアーチ状形式をとっている。

羨道は東の方へ開口していたと推定されるが、この1号横穴墓の主軸線は北70°西となっている。玄室の前方部が崩壊しているので奥行を明確にすることはできないが、南側で2.1mある。幅は2.55m、天井までの高さは1.2mであるが、この玄室内床面の南側には全面に屍床として扁平な川原石が敷き詰められ、その上に被葬者およびその副葬品が埋葬されていた。この玄室内部の奥壁に向って左側に屍床として扁平な丸石を敷き詰める形式は、光音寺の2号横穴墓でも認められるところで興味深く感ぜられた。

なお、玄室内の壁面には幅12cm～15cmの鉄製品によって、削り取りが行われた装飾的調整痕が遺存していた。この横穴墓は軟質砂岩の急傾斜面に構築され、地表面からの比高2.87mであるが、国道10号線からの比高は3.4mとなっている。

2、出土遺物

造成工事により、玄室内の天井部分が破壊され、その崩土が埋納された副葬品の上に落下したため、中央床面上に埋葬された遺物は破損して散乱していたが、特に直刀などは復元できなかほどの状態であった。ところで1号横穴墓からは次のような副葬品が発見された。金環1、銀環1、銅環1、金銅輪1、銅輪1、須恵器(杯)1、土師器(杯)1、(破片)13、直刀破片、



第1号横穴墓玄室内部

など。

1. 金環(第3図4)

(図版③-1)

玄室南側の敷石上に納置されていた副葬品であり、長径3cm、短径2.7cm、幅0.7cm、厚さ0.8cm、鍍金は内側に残存しており、大部分は地金の銅製品が錆化して緑青が見える。

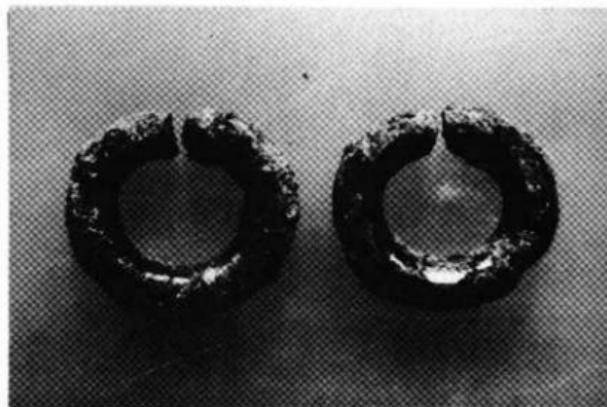
同一地点にもう1個耳飾が検出されたが、その1個は銀製品のように見えるので、もしかすると金環、銀環の耳飾を同一人物が着用していたのかもしれない。

2. 銀環(第3図3)(図版③-2)

①の金環と同一地点から出土したが、銀の鍍金は内側に極く一部分認められるだけで、全般に錆化して銅分が緑青をふいている。この銀環は長径3.2cm、短径2.9cm、幅0.7cm、厚さ0.8cmとなっている。

3. 銅環(第3図5)(図版③-3)

玄室の南側壁の傍に1点だけ副葬されていたが、前記の金環、銀環に比して少し細身になっている。この銅環は長径2.9cm、短径2.5cm、幅0.5cm、厚さ0.45cmを計測できるが、全面に錆化が進んでいる。



図版3-1 (左)、2 (右)



図版3-3

4. 金銅輪(第3図7)

(図版③-4)

玄室内の敷石の上に埋納されていたが、橢円形状で金の鍍金が施されている。その輪身は環状ではなく角状を呈している。

その長径は3.4cm、短径2.3cm、幅

0.3cm、厚さ0.2cm、銅分が銹化し

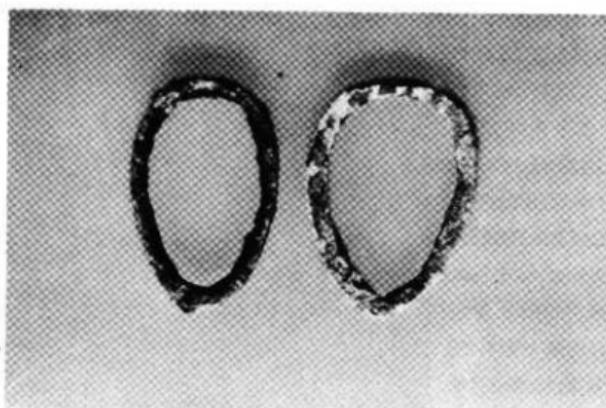
てはいるが、鍍金された金が充分に確認できる。この使用目的は明確ではないが、装身具に關係のある副葬品であらう。

5. 銅輪(第3図6)(図版③-5)

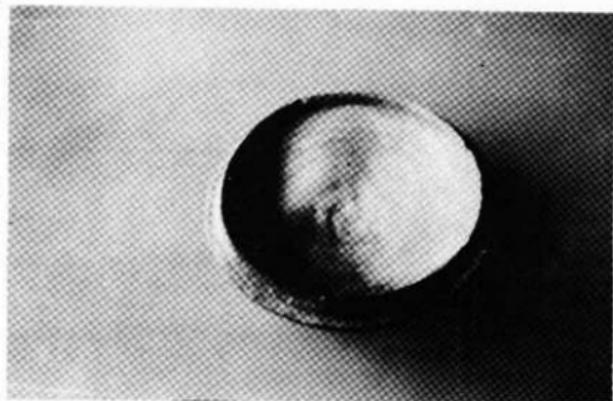
④の金銅輪と同一地点から検出されている。銅製品であるが同一目的に使用されたものであらう。金環、銀環の場合と同じく2個組みでありながら、同一の鍍金製品でない副葬品の中に、この横穴墓被葬者の階層性がうかがわれる。

6. 須恵器一杯(第3図1)(図版③-6)

この杯は造成工事中に出土した土器で、そのため1号横穴墓実測図の中には記入されてない。口径12.8cm、器高4cm、立ち上がりはやや内傾しながら比較的に高さを保っているが、口縁部から底部にかけては次第に厚くなっている。こ



図版3-4 (右)5 (左)



図版3-6

の1号横穴墓の年代考察に必要な唯一の資料である。

7. 土師器一杯
(図版③)-8,9)

口径13cm、器高4.2cm、口縁部は薄く外反りを呈しているが、胴部と腰部は稜線によって段になっている。また、底部の中央に4cm～5cmの切り合った3本の線刻窯印が施されている。

8. 直刀破片
(図版③)-10)

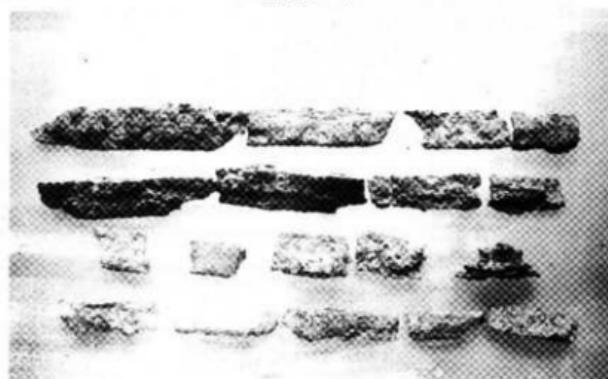
玄室南側壁に接して約30cmの直刀1振と天井部剝落崩土によって散乱した直刀破片がある。いずれも破損度がひどく、復元が不可能になっている。



図版3-8

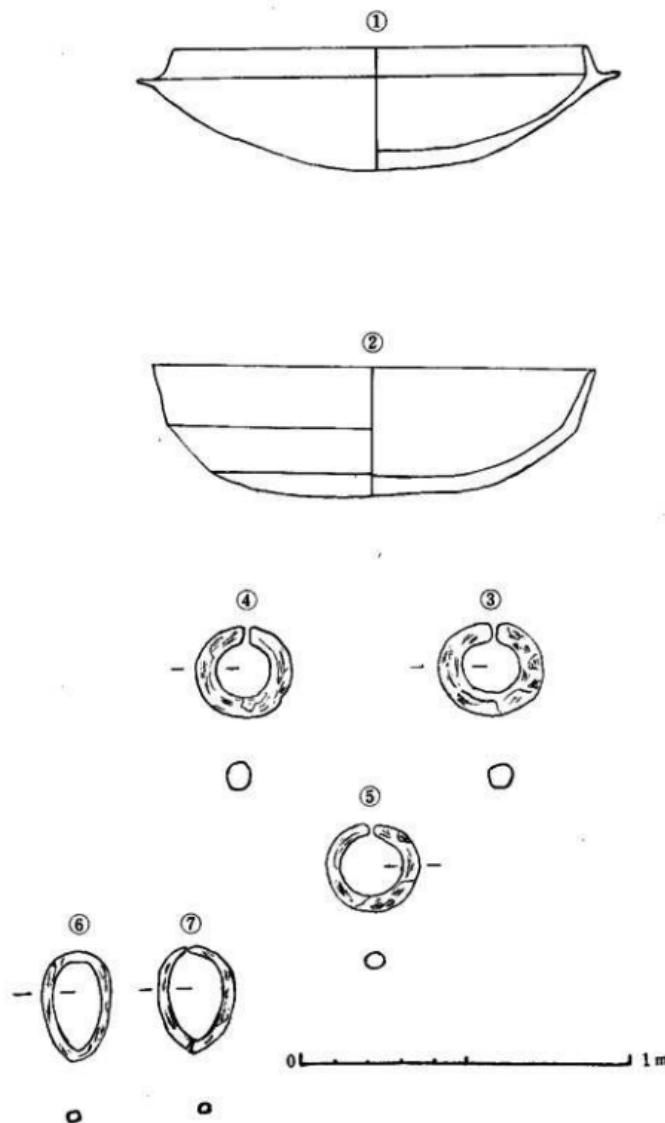


図版3-9



図版3-10

第3図 永谷第1横穴墓出土遺物実測図



IV 永谷 2号横穴墓

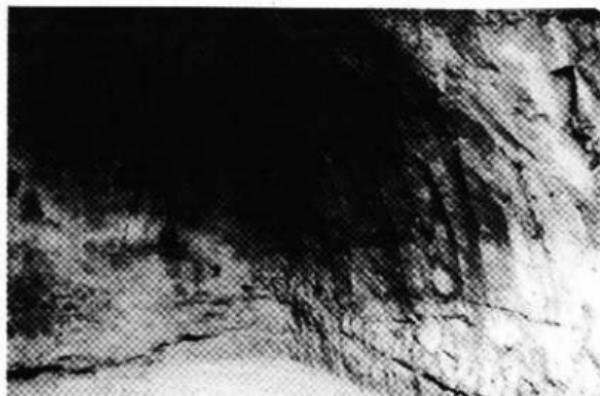
1. 内部構造

2号横穴墓の玄室は隅丸方形状を呈し、奥壁の方がわずかに広がっている。東へ羨道を開口しており、主軸線は北70°西の方向をとっている。玄室の奥行は3.15m、幅（中央部）2.98m、天井の高さ1.7mとなっているが、玄室の奥壁と北側壁に沿って、幅約10cmの溝がめぐらされている。玄室の天井は、奥壁から約1.6mの所から前方は崩壊している。

また1号横穴墓と同様、玄室の壁面は約10cm幅の鉄製品によって、縦方向に削り取りの壁面調整が施されている。玄室天井部の形態は、内部が剥落していて明確ではないが、ドーム様式の形態をとっている。

なお、羨道部は約70cmの長さ両側が残存しているが、その先は造成工事により破壊され急傾斜の断崖になっている。

また、この2号横穴墓の形態は光音寺5号横穴墓に類似している。

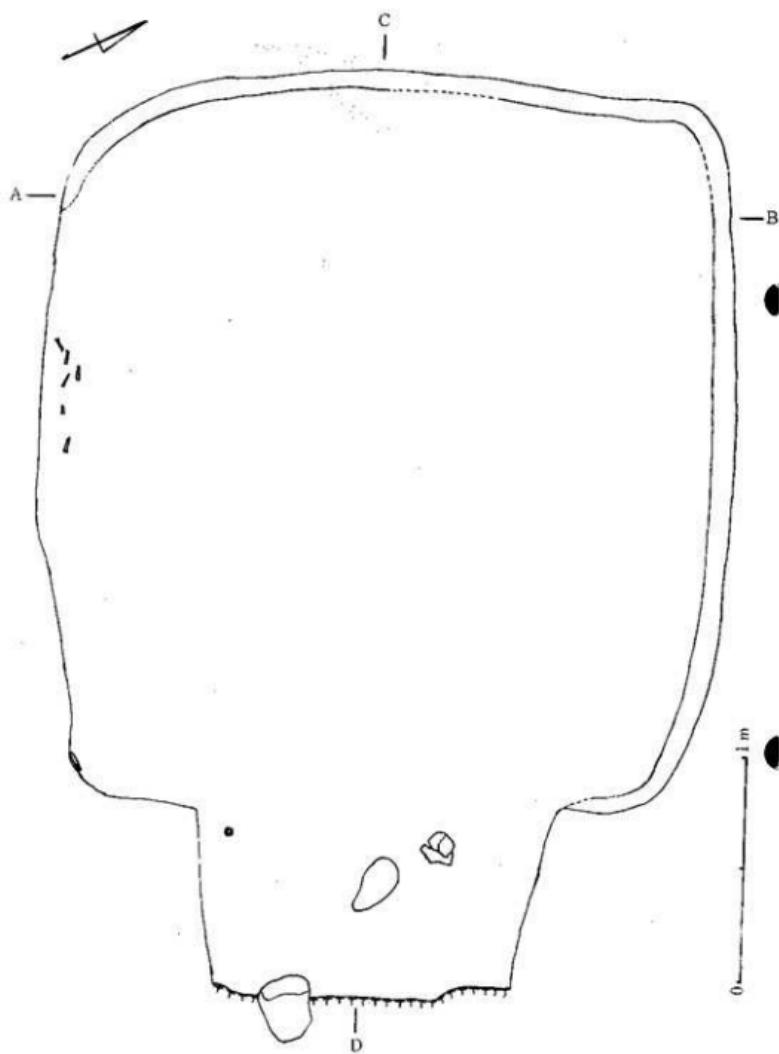


永谷第2号横穴墓内部側壁面

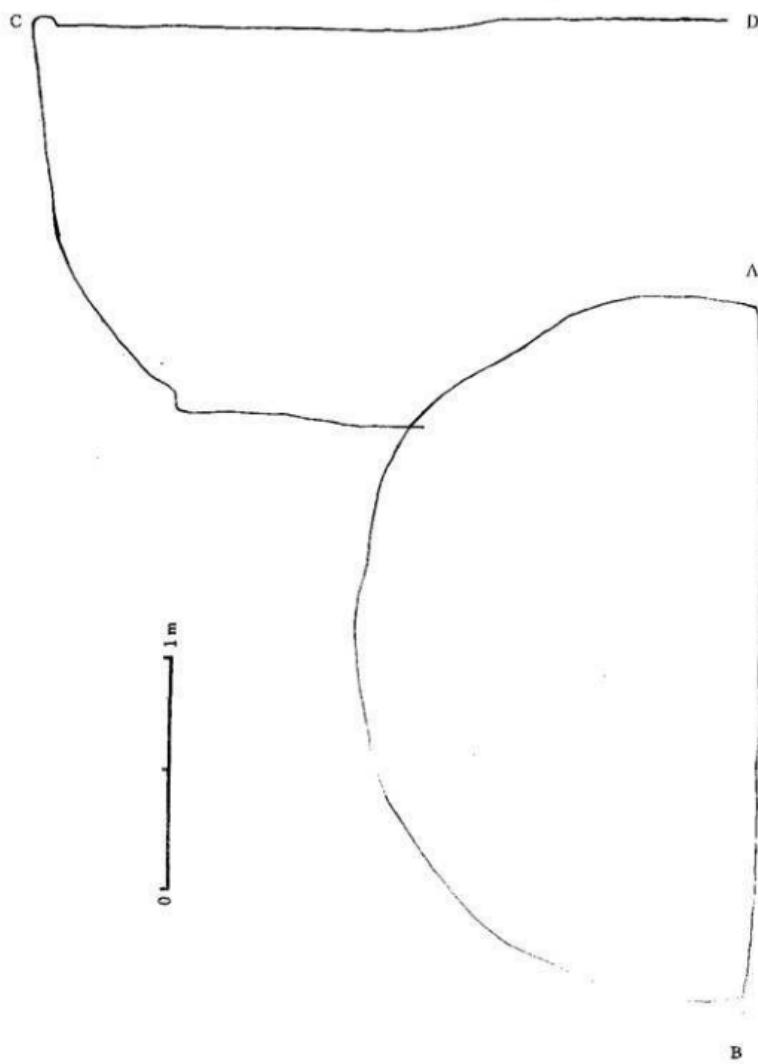


第2号横穴墓玄室内部

第4図 永谷2号横穴墓実測



第5図 永谷2号横穴墓実測図



2. 出土遺物

永谷 2 号横穴墓

出土の副葬品は次
のような内訳にな
る。土師器片16、
鉄鐵 2、鉄鐵片 3、
刀子 1、銅環 1、
小銅環 1。

1. 土師器片(第6図)

1)(図版⑤-1.2)

①は底部である
が、この土師器が
どのような形態に
なるか明白でない。
土師器片から察す
るに楕形土器の可
能性もある。

2. 鉄鐵 2(第6図 2、

3)(図版⑤-3.4)

②二つに折れて
いるが、長さ 10.5
cm、身幅 1 cm、厚
さ 0.5 cm、刀形有
茎細根鉄鐵の形式
である。③も同様

の形式をとり、長さ 13.4 cm、身幅 0.8 cm(中央部)、厚さ 0.6 であるが形式は②と同様で、
やはり 2 つに折れている。2 本ともに銹化しており、腐蝕の度も進んでいる。

3. 刀 子(第6図 4)(図版⑤-5)

長さ 8.2 cm、身幅 2 cm、厚さ 0.8 cm 刀身は相当に腐蝕しており、錆びの度も進んでい
る。刀身の先の方が欠損しているが、柄部には木質部も確認できる。

4. 銅 環 2. [第6図 5、6](図版⑤-6.7)

⑤銅環の長径 2.5 cm、短径 2.3 cm、幅 0.6 cm、厚さ 0.7 cm 銹化しており緑青も相當に

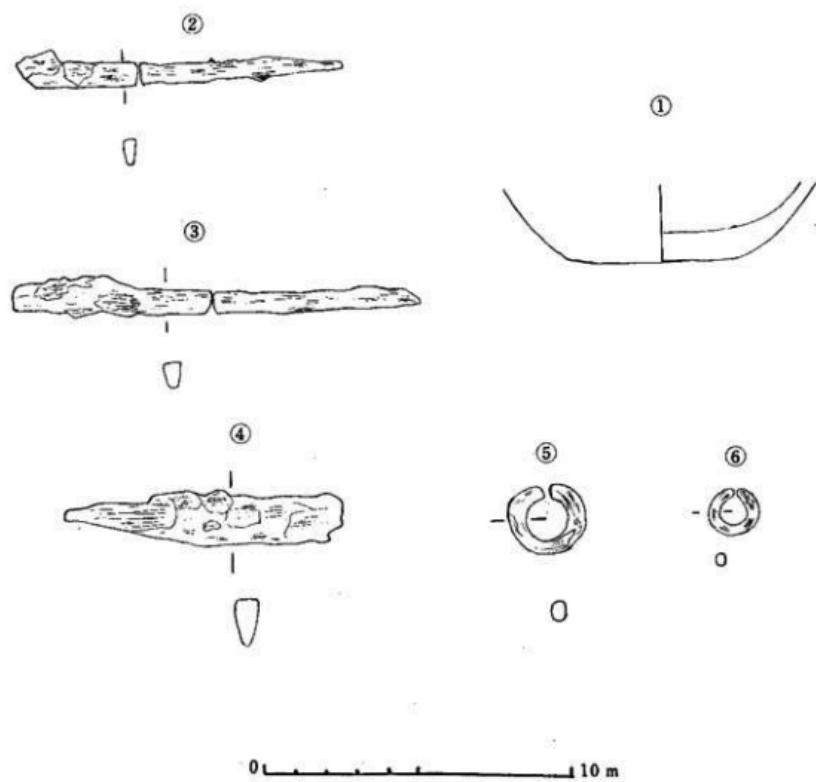


永谷第2号横穴墓玄室内部床面



第2号横穴墓玄室内部の遺物

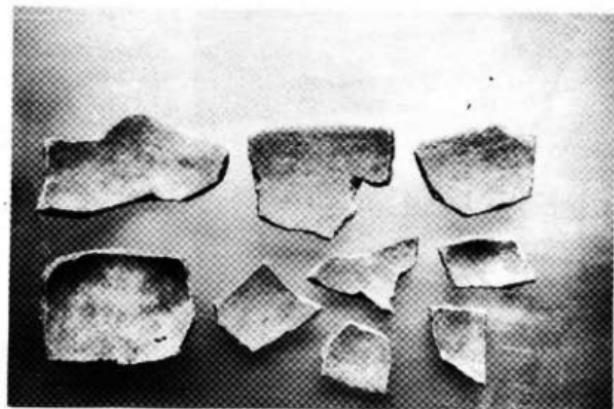
第6図 永谷第2横穴墓出土遺物実測図



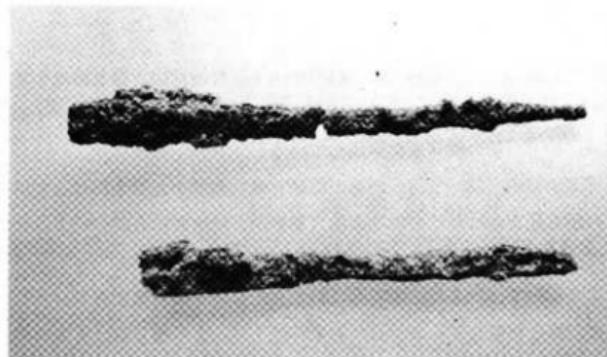
出ている。⑥の小
銅環は長径 1.7cm、
短径 1.5cm、幅
0.4cm、厚さ 0.5
cm この小銅環は、
排土作業中に発見
された遺物であり、
実測図の中には記
入されてない。



図版5-1



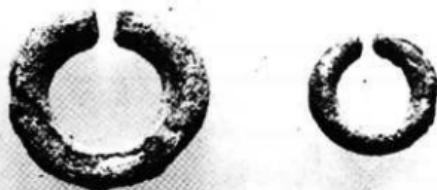
図版5-2



図版5-3、4



図版5-5



図版5-6、7

V ま と め

宮崎県における横穴墓の分布については、県の中央平野丘陵地帯と県北の高千穂一帯の2地域に大きく区別できるが、前者の横穴墓群としては主として宮崎市、佐土原町、西都市などの地域に約400基の横穴墓が群集している。

そして中央平野部地帯の内陸部では、西都市の種北横穴墓群が北限地になっているが、海岸部では、永谷から光音寺にかけての高鍋横穴墓群が、緯度的にも同一線上の北限に、位置している。

前述したように高鍋町では、これまで2回にわたり光音寺の横穴墓調査が行われたが、形態的には永谷横穴墓と類似している。しかも光音寺1号、2号横穴墓は玄室の内部形式が寄棟造の様式を呈し、しかも6号墓からは金環、勾玉、管玉それに切子玉なども出土しており、最近発掘調査した西都市千畳横穴墓とともに、高鍋横穴墓は豊富な副葬品も検出しているので注目しなければならない。

なお、この永谷横穴墓の年代であるが、1号横穴墓出土の須恵器（杯）が編年分類で第Ⅲ様式にあてられるので、6世紀後半頃の時期に比定してもよいと思われる。ところで、光音寺の寄棟造形式の横穴墓は永谷横穴墓よりも先行する時期と考えられ、むしろ光音寺横穴墓と千畳横穴墓が同一年代頃に想定できる。

以上、永谷横穴墓を光音寺横穴墓ならびに千畳横穴墓との関連において考察してみたが、これら児湯地方にみられる代表的な横穴墓群が日向の横穴墓群の中で占める意義については、さらに今後考究してみなければならない。

註

- ⑤ 日高 正晴「日向における千畳横穴墓とその考察」「西都原古墳研究所年報」第3号
西都市教育委員会、昭和61年3月

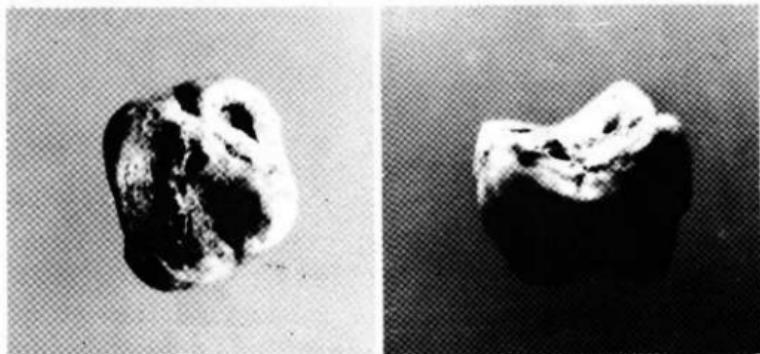
永谷横穴墓出土の歯牙について

永谷第1横穴墓の玄室より出土した8歯牙について、形態的な面から考察してみたいと思う。

1. 老年期の歯牙

老年期の屍体の歯牙として残存しているのは、上顎右側第2大臼歯、上顎左側第1小臼歯、下顎左側犬歯である。

1) 上顎右側第2大臼歯(図版①-1, 2)

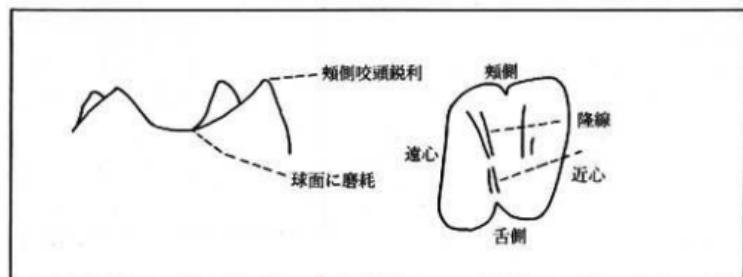


歯冠部

1-1 咬合面

1-2 側面

歯頭部付近で表面崩壊しているので高さは不明となっている。咬合面は近心頬側三角隆線と、遠心頬側三角隆線、舌側三角隆線がわずかに残り、ほとんど全体的に磨耗している。頬舌的には、球面に似た湾曲をして磨耗しており、頬側咬頭、舌側咬頭については、相当に鋭利になっていることは、強い咬合圧で咬合していたものと思われる。また遠心頬側三角隆線と、舌側三角隆線は残存している。しかし近心頬側三角隆線は磨耗し消失している。



頬側溝、舌側溝、近心遠心の辺縁隆線は消失している。歯根部なし

II) 上顎左側第1小白歯(図版②-1, 2)



2-1 咬合面
歯冠部



2-2 側面

歯冠部の高さは、頬側 0.7cm、舌側 0.6cm である。

歯冠部はかなり磨耗があり、特に、頬側咬頭に磨耗がある。中央溝は残存し、遠心三角溝はわずかに認められ、辺縁隆線は少し残っている。

近心三角溝がみられないのは、咬合面近心半分に咬合接触があったことで、正常な咬合関係であったことが窺える。

歯根部

歯根部は $\frac{1}{2}$ 程度しか残存していない。



ii) 下顎左側犬歯(図版③—1, 2)



3-1 舌側面

歯冠部の高さは頬舌とも約1cmである。



3-2 側面

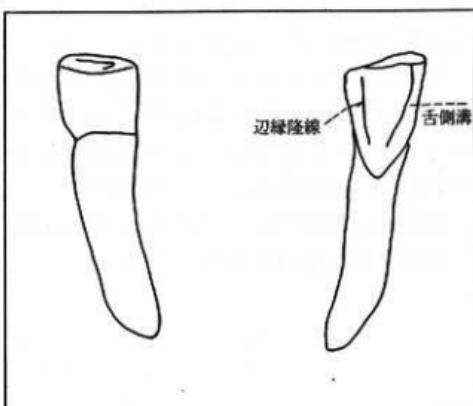
切端部に平坦になった磨耗面があり、その中央部に凹になった窩がある。これは相当な年数咀嚼すると凹部出来る。これは食物の切断に有効とされている。(現代人にもみられる) 即ち切端部の平坦になった磨耗は、上顎左側犬歯との咬合接触において、磨耗していることであり、かなり側方圧の安定した咬合であったことが窺える。

舌面は近心・遠心舌面溝があり、辺縁隆線も著明に残っている。

歯根部

歯根部の長さは歯冠部に比べて非常に長い、長さ約1.7cm、根は遠心方向に全体的にカーブをえがいており、近遠心的な圧扁がある。

根が長いことは、骨植堅固であったことになる。



2. 壮年期の歯牙

壮年期の歯牙として残存しているのは、上顎左側第1大臼歯、上顎右側第2大臼歯である。

i) 上顎左側第1大臼歯(図版④-1, 2)



4-1 咬合面

歯冠部

高さ 頬側 0.7 cm 舌側 0.6 cm

咬合面の形態は4咬頭とも磨耗しており、近心頬側咬頭は半月状に磨耗している。また近心頬面隆線と、遠心頬面隆線はわずかに、その原型を残している状態である。近心遠心辺縁隆線は消失し、咬合面には頬側溝、遠心舌側溝が残り、三角隆線はほとんどみられない。

根は3本で舌側根は長く(約1.4 cm)頬側根は2根に分岐し、高さは2根とも約1 cmである。



4-2 側面



ii) 上顎右側第2大臼歯(図版⑤-1, 2)



5-1 咬合面



5-2 側面

歯冠部

高さ 頰側 0.8cm 舌側 0.8cm

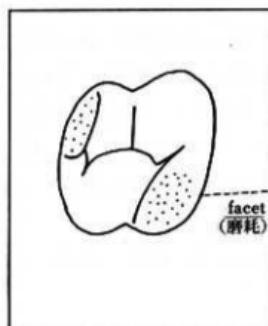
上顎第1大臼歯と類似した形態である。近心辺縁隆線と、遠心辺縁隆線は原形を止めしており、近心頰側三角隆線と、舌側三角隆線は残存している。

しかし遠心頰側三角隆線は磨耗し、特に、舌側咬頭近心斜面に梢円形の磨耗面がある。これは本歯牙が挺出歯か、または歯牙の前方に欠損があったのではないかと、思われる。

歯根部

長さ 舌側根 約 1.0cm 頰側根 1.1cm

形態的にみて根は短く、歯根部で不明瞭な部分がある。2根分岐である。



3. 若年期の歯牙

若年期の歯牙としては、上顎左側側切歯、上顎右側中切歯、下顎右側犬歯である。

1) 上顎左側側切歯(図版⑥-1, 2)



6-1 唇面
歯冠部

高さ 頬側 1.1cm 舌側 1.1cm

歯冠部の形態としては丸味をおびている。切端部をみると、切端結節、即ち、近心発育葉、中央発育葉、遠心発育葉が残っており、舌側歯頸葉もある。このような場合には割合に若い人であることが窺える。

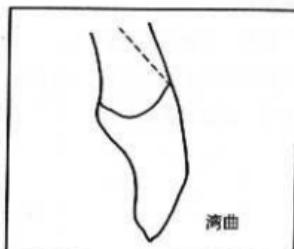
歯冠部の巾(唇舌的)も薄く、切端線は内側にカーブをえがいて湾曲している。この湾曲がある場合には優しい感じを与えるものである。

歯根部

歯根部は少しき度しか残存していない。



6-2 側面



II) 上顎右側中切歯(図版⑦-1, 2)



7-1 眶面

歯冠部

高さ 鞍側 1.3cm 舌側 1.2cm

形態的に鞍舌的に圧扁された、巾の薄めの歯牙である。切端部には発育葉がみられ、若年者の歯牙の形態をそなえている。

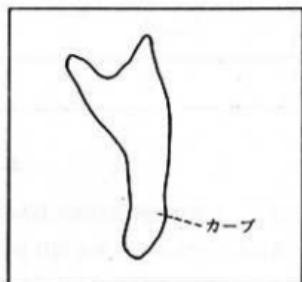
舌側窩は、巾広く深くなっており、辺縁隆線も明瞭である。舌面には全く磨耗はなく、近遠心溝は著明である。切端線には湾曲がある。

歯根部

歯根部は $\frac{1}{2}$ 程度崩壊している。



7-2 側面



Ⅲ) 下顎右側犬歯(図版⑧)

歯冠部

長さ 頬側約1.3cm 舌側 不明

形態的にみて少し長めの歯牙で、切端部の中央の尖頭部は著明に突出し磨耗は全くみられない。近心唇面溝も明白に残り、また歯頭部近くには、横走する歯壁もみられる。

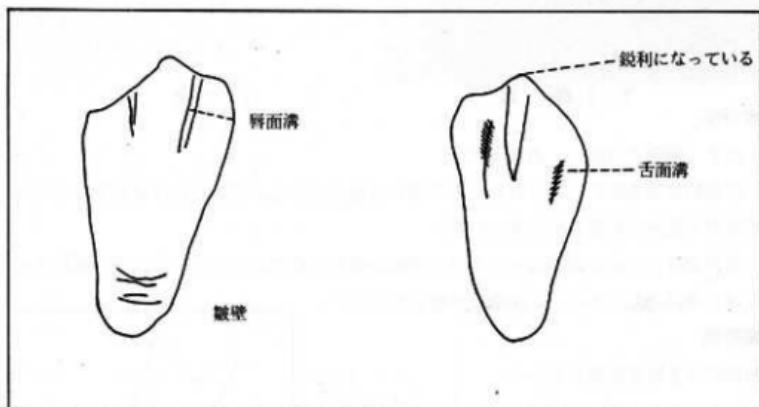
舌面溝は著明にみられ、辺縁隆線も明瞭である。舌面歯頭溝はみられず、舌面歯頭隆線は肥厚せず結節状にもなっていない。

歯根部

歯根部は崩壊している。



8 舌側面



4. 結論

以上、古墳時代後期の横穴墓から出土した歯牙を、老年期、壮年期、若年期に分類して考察してみたが、8本の歯牙から想定されることは3屍体であり、歯牙の磨耗度よりみて、老年期は約50才以上、壮年期は約30才から50才ぐらい、若年期としては約15才から25才ぐらいと推定することができる。

